福岡県における今後の取組み（案）

【必要な対応】

〇高齢者の多剤服用（ポリファーマシー）対策のための指針の普及・浸透を図る。

〇多様な医療現場の多職種連携の下での情報収集、管理及び共有

〇高齢者の薬剤使用に関する医薬関係者及び高齢者自身の理解・意識の向上

【課題】

- 医師、薬剤師でポリファーマシーに対する認知度は高いものの、減薬アプローチや指針・ガイドライン等の活用事例は少なく、指針・ガイドライン等を活用したエビデンスの蓄積が求められている。
- ガイドライン等の活用には、減薬に対する安全面での配慮が不可欠で、医師、薬剤師、看護師等の多職種連携が必要なため、ハードルが高い。

〇事業の実施

福岡県内での指針の活用実績を得るため、協力医療機関を選定し、東大病院で実施している「薬剤師による持参薬評価テンプレートを用いたスクリーニング」を導入して、減薬アプローチを実施する。

- 薬剤師による入院患者の持参薬評価テンプレートを用いたスクリーニング
- 薬剤調整の検討が必要な患者情報を医師へ情報提供
- 必要に応じて多職種協働での処方見直し
- 処方への影響を解析

〇研修会の開催

指針の普及・浸透を図るため、医師、薬剤師、看護師等の多職種を対象に、減薬アプローチの取組事例等の講演を実施する。

・ポリファーマシー対策のための指針

・減薬アプローチの取組事例

・高齢者に特徴的な有害事象

・高齢者に適切な薬物療法

・国や県の動向、取組

〇お薬手帳の活用促進

服薬情報の一元化を図り、お薬手帳の正しい活用を促進するため、75歳以上の重複服薬者に対して、リーフレット及びお薬手帳ホルダーを送付し、その効果を解析する。

・リーフレット
お薬手帳を持参することの意義やメリットを記載

・お薬手帳ホルダー
保険証、診察券などと併せてお薬手帳を携行できるもの

東大病院；薬剤師による持参薬評価テンプレートを用いたスクリーニング

入院時に**6種類以上***服用しておりかつ**7つの評価項目のいずれかに該当**する場合は、
薬剤調整に関する検討の必要性**あり**とする

*現在、先行して当テンプレートの運用を開始を開始していた一部の診療科を除き、**10種類以上**服用している患者を対象

薬剤総合評価

入院時に6種類以上の内服薬を服用しており、かつ下記の1つ以上の項目に該当する場合は、医師とともに多剤併用に関する薬剤調整の必要性について特に協議する。

薬剤調整に関する検討の必要性　◉あり　○なし　○未選択

入院時の内服薬剤数　12（種類）

（頓用薬や服用4週間未満の内服薬を除き、同一銘柄は1種類と計算）

○あり　◉なし　○未選択
患者や家族から服薬困難の訴え

◉あり　○なし　○未選択
65歳以上で、高齢者の安全な薬
要する薬物のリスト」に該当する

◉あり　○なし　○未選択
服薬管理能力の低下あり（認知

○あり　◉なし　○未選択
同効薬の重複投与の観点から、

◉あり　○なし　○未選択
効果や副作用の観点から、多剤

○あり　◉なし　○未選択
薬物相互の観点から、多剤併用

○あり　◉なし　○未選択
患者の疾患や肝・腎機能などの

7つの評価項目

<スクリーニング評価項目>

- 薬剤調整希望あり
- 65歳以上で高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2015に該当あり
- 薬剤管理能力の低下
- 薬効重複
- 効果や副作用の観点
- 薬物間相互作用
- 疾患や肝・腎機能の観点

上記該当項目に関する詳細

・マイスリー錠が「特に慎重な投与を要する薬物のリスト」に該当します。
・昼食後服用薬の飲み忘れが多いようです。
・他院より下肢の掻痒感に対しアレグラ錠が処方されていますが、現在症状は無いとのことです。

詳細を記載

薬剤師のスクリーニングと処方への影響；東大病院

		全体	5剤以下または スクリーニング(−)	6剤以上で スクリーニング(＋)
	患者数	143	105	38
性別	男性(%)	53.1	49.5	63.2
年齢	平均±SD	66.5±15.9	63.6±16.2	74.3±12.4
入院時薬剤数	平均±SD	6.5±4.0	5.2±3.4	10.1±3.3
退院時薬剤数	平均±SD	6.4±3.6	5.4±3.5	9.1±3.7

$p<0.05$

平成28年11月～12月に東京大学医学部附属病院の老年病科、糖尿病代謝内科、腎内分泌内科、血管外科の4診療科の入院症例に対して評価

→ 2017年11月より全診療科に拡大